

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目： 基盤研究 (C)
 研究期間： 2007～2009
 課題番号： 19520440
 研究課題名 (和文) ベトナム人に対する効果的日本語教育のための基礎研究：音声・文法と人材育成の点から
 研究課題名 (英文) Basic Research on Effective Teaching Japanese for Vietnamese : From the Viewpoint of Grammar, Phonetics, and Teacher Training
 研究代表者
 杉本 妙子 (SUGIMOTO TAEKO)
 茨城大学・人文学部・教授
 研究者番号： 30206429

研究成果の概要 (和文)：

本研究課題では、日本語習得研究として現地調査を行い、ベトナム人が習得しにくい日本語音声、発音と聞き取りの誤用のずれ、格助詞に関わる誤用等について明らかにした。また、現地調査に基づく日越語対照研究では、ベトナム語の di (行く)・den (着く)・授与動詞 cho の文法化の解明、日越語の助詞の対照と教育上の問題点の指摘等をした。さらにこれら研究成果をベトナムで継続的に発表することにより、ベトナムの日本語教育研究の向上に貢献した。

研究成果の概要 (英文)：

In this subject of research, we have carried out a field survey of acquisition of Japanese as a foreign language, and have made clear what Vietnamese learners would find difficult in practicing Japanese pronunciation, especially in hearing test, and what they often mistake in learning the case markers in Japanese. In addition, in a contrastive study of Japanese and Vietnamese based on field surveys, we have made clear the grammaticalization of Vietnamese verbs DI (go), DEN (arrive) and CHO (give), and have pointed out some differences between the particles in Japanese and Vietnamese as well as some issues in Japanese teaching method. Furthermore, by presenting the results of our research at the academic meetings in Vietnam, we have contributed in teaching and learning Japanese in this country.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：ベトナム語圏日本語学習者，音声・発音習得，文法習得，日越語文法対照研究，文法化，日本語教育，現地教育研究者の育成支援

1. 研究開始当初の背景

ベトナム人日本語学習者に関する習得研

究や日越語対照研究は、その数自体が少ないだけでなく、多くは文法や音声に関する部分的なものであり、体系的な研究に乏しい状態である。また、ベトナム国内においても、これらの研究に関わる研究者数も研究数も限られたものであり、研究環境も途上の状態である。その一方で、ベトナム国内では、近年の日系企業の大規模な進出や日本人観光客の増加など、日本語の需要は増している。そして、大学の日本語部・日本学科等をはじめ、民間の専門学校や企業内日本語クラス、私塾等のさまざまな場で日本語教育が行われ、日本語学習者数は英語、仏語、中国語などに次いで多く、また増加し続けている。このような状況の中、2003年11月からベトナム・ハノイ市において、中等教育機関(中学校)でも日本語教育が開始され、翌年以降、実施校や実施地域が拡大され、それと並行して中等教育における教科書作りも進行している。ベトナムにおけるこのような日本語教育の拡大と日本語需要の拡大という状況は、ベトナム人日本語学習者に適した日本語教育を求めるものであり、そのための体系的な基礎研究の必要性は高い。そして、そのような基礎研究は現地の教育研究者によっても行われる状況を実現すべき時に来ていると考えられる。

2. 研究の目的

ベトナム現地調査をもとに日本語習得研究ならびに日越語対照研究を行うとともに、その成果をベトナム国内において公表することによって、ベトナムにおける日本語教育に、研究面と人材育成の面から貢献しようとするのが、本研究課題の目的である。

より具体的には、次の4つの柱からなる。(1)対照言語学の方法を用いて日越両言語の発音・文法の構造的なずれを明らかにする、(2)誤用分析の方法によってベトナム人日本語学習者に多い誤用の特徴、つまり構造的なものかどうかや個別的吗普遍的か、を明らかにする、(3)これら基礎的研究をもとにベトナム人学習者に対する日本語教育における重点的学習(教育)項目を提示する、(4)本研究の調査や調査結果の検討や公開をベトナムにおいて若いベトナム人教育研究者とともに行うことによって、ベトナムにおける日越対照研究や第二言語習得研究に携われる人材を育成する。

3. 研究の方法

これまでの研究成果を基に、研究代表者は主として音声・文法の習得に関して、研究分担者は日越語の文法に関して、現地協力者の協力を得ながら現地調査等を行い、ベトナムにおける日本語教育のための基礎研究を進める。また、在ベトナムの国際協力機関やベ

トナムの大学と連携しながら、基礎研究の成果をセミナー等の形で現地において公表し、ベトナムにおける日本語教育に役立てる。具体的な研究実施計画とその方法は以下のとおりである。

(1) 発音・文法の習得研究について

①研究代表者が既に個人的に調査・分析を進めている音声に関する調査結果の分析によって明らかになった発音の誤用傾向をもとに、主に中級レベル対象の発音・音声聞き取り調査の調査票を現地協力者等の協力を得て作成し、ベトナム・ハノイにおいて調査を実施する。(H19・20年度) ②音声に関する調査等によって得られたデータをもとに、ベトナム語圏日本語学習者の発音・日本語音の聞き取りの誤用の全般について、その実態と特徴などをとりまとめ、研究の成果として論文等の形で公表する。また、発音教育(習得)において注意すべき点や誤用回避の方法などについて、現地協力者等と検討する。(H19～21年度) ③音声・発音習得研究と並行して、H19年度までに研究代表者が個人的に調査した文法習得調査結果およびベトナム人学習者の作文を分析し、主に日本語の助詞・助動詞に関する誤用の傾向を分析し、論文等の形で公表する。(H19・20年度) ④文法に関する誤用傾向をもとに、現地協力者とともに文法に関する調査票を作成し、予備調査、本調査を行う。(H20・21年度) ⑤H20・21年度の文法に関する調査等によって得られたデータをもとに、ベトナム語圏日本語学習者の助詞・助動詞に関する誤用の実態と特徴などをとりまとめ、研究の成果として論文等の形で公表する。(H20・21年度) ⑥ベトナム北部地域で実施した音声ならびに文法に関する調査と同様の調査を、中部地域等にも拡大して行うとともに、順次、その成果も公表する。(H21年度およびそれ以降)

(2) 日越語文法対照研究について

研究分担者は、これまでの研究成果を踏まえて、より体系的に日越語間の文法対照研究を進める。①文法、特に日本語助詞等とベトナム語前置詞等について、それらと対応する動詞との関連にも注目しながら、日越語比較対照表を作成する。(H19年度) ②日越語の文法構造の対照研究の今後の課題を整理して対照研究の研究対象項目を決定し、研究計画をたてる。(H19年度) ③現地調査と文献調査を中心に、順次、助詞・補助動詞類を中心とする日越語対照研究を計画的に進めていく。また、その研究成果も随時、論文等で公表する。(H19～21年度)

(3) ベトナムにおける日本語教育・人材育成への貢献について

①研究代表者が中心になって在ベトナムの国際協力機関であるVJCCハノイとの連携を

進め、ベトナム国内での成果等の発表ならびにベトナム国内の日本語教育・日本語研究等の向上に貢献する活動として、ハノイを中心にセミナーの開催等を行う。(H19～21年度およびそれ以降) ②また、現地協力者と調査等の検討の機会や情報交換の機会を持つなどによって、習得研究・対照研究の向上を図る。(H19～21年度) ③これらの活動を継続しつつ、実施する地域を拡大する。(H21年度およびそれ以降)

4. 研究成果

研究計画にしたがい、研究代表者・分担者ともに、現地調査に基づいてベトナム人日本語学習者の習得研究と日越語文法対照研究、および人材育成への貢献としてベトナム国内での研究成果の公表等を行った。以下にこの3分野の成果に分けて述べる。

(1)ベトナム人日本語学習者の発音・文法の習得研究成果

研究代表者が、主に現地調査に基づいた発音ならびに文法の習得研究を行った。ベトナム国内の日本語学習者を対象とした調査に基づく習得研究は先行研究がきわめて少なく、音声についての本研究の成果は、音声全般にわたるものであり、かつ聞き取りと発音の両面から体系的に音声習得における問題点を明らかにした点に価値があると言える。また、調査研究はベトナム北部・ハノイを中心に行ったが、中部地域での調査も本研究で開始しており、北部と中部の比較等、習得における地域差という視点からの研究に発展させていく予定である。

本研究課題では、2007年度以前に行った調査ならびに上記調査の結果を中心に研究成果をまとめ、論文や口頭発表により公表した。その主な成果の概要は以下のとおりである。なお、後掲の「主な発表論文等」の該当する論文等は括弧中に番号で示した。(以下、同断。)

①現地協力者(ハノイ国家大学外国語大学Pham Ha氏、ハノイ大学Nguyen Thi Minh氏、フエ外国語大学Huong Tra氏等)の協力を得て、音声と文法に関する現地調査を、2007年8月、2008年3月・6月・2009年3月・8月、2010年3月に行った。

②日本語とベトナム語の音声と比較対照して、音節言語であるベトナム語と拍を音の単位とする日本語の特徴や差異を踏まえて、ベトナム語圏学習者の日本語の発音における誤用として、母音の長音化・長母音の短音化、促音に関する誤用、撥音に関する誤用、サ・ザ行直音の拗音化・シャ・ジャ行拗音の直音化、ツの拗音化・チュの直音化、ダ行とラ行の交替について、日本語聞き取りと発音の両面から、誤用の傾向や異同を指摘した。また、

ベトナム語は有声・無声の対立があるため、子音の有声化・無声化の誤用については問題ないことを指摘した。(論文(5))また、音節言語であるベトナム語を母語とする学習者にとって、音の長さによる日本語の「長音・短音」の習得が、聞き取りにおいても発音においても習得しにくく、また体系的に誤用が起こることを指摘した。(発表(6))

③ハノイ大学学生を対象に行ったボイス・テンス・アスペクト・活用等についての15項目と助詞についての20項目の調査結果を概観するとともに、特に助詞についての調査結果に注目し、着点のニや主語のガなどの正答率は高いが、対象を表すニとヲや動詞の自他と格助詞ガ・ヲとの対応などにおいて誤答率が高いことなどを指摘した。(論文(1))また、ハノイ大学2・3年生対象に行った助詞40項目に関する調査から、正答率の高さ、即ち習得のしやすさによって分類・分析した助詞の用法を具体的に明らかにするとともに、日本語学習期間の長短が助詞の習得の度合いと必ずしも一致しないことを指摘した。(発表(7))

(2)日越語文法対照研究について

研究分担者が、現地調査や文献調査に基づいて日越語の助詞や重要な動詞のいくつかに注目した文法対照研究を行った。研究分担者は日越語対照研究の第一人者であり、その研究成果は、未だ解明されていない点の多いベトナム語文法研究としても、また中国・韓国朝鮮・日本・ベトナムの漢字文化圏の言語の比較研究の一部としても、その重要性と意義を認めることができる。また、対照研究の成果等をもとに、ベトナム人日本語学習者が文法を学習する際の重要項目や注意点の指摘をするなど、日本語教育への応用を試みた点も評価できる。

①現地協力者(フエ外大Tra氏・ホーチミン国家大人文学部フエ氏等)の協力を得て、2008年3月・11月、2009年8月にベトナム・フエとホーチミンにおいて文法に関する資料収集調査や情報交換等を行った。

②文法化の観点から、いくつかの日越語の比較研究をおこなった。まず、日本語の「行く」とベトナム語の*di*の文法化の諸相を、具体例を多用しながら概観した上で、「～ていく」と～*di*の対応関係ならびに文法化における相違点、即ち「～ていく」は持続・進行を表すアスペクト形式の役割に重点が置かれ、一方～*di*はアスペクト形式と同時に相手への働きかけを表すモダリティー形式としても働くことを明らかにした。(論文(4))次いで、使役動詞や接続詞としても使われるベトナム語*cho*に注目し、使役動詞の用法から接続詞の用法への機能の拡張状況を多数の例をもとに考察し、接続詞的な*cho*が一種の「非

現実」(irrealis)を表示する標識として機能することを明らかにした。(論文(3))また、日本語「のが／のを」とベトナム語“đă...lại...”を中心に、日越語における接続詞の形成プロセスと話者の表現意図との関係を明らかにした(発表(4))さらに、ベトナム語の方向動詞 den を取り上げ、前置詞、接続助詞および取り立て詞への機能拡張における意味的・構文的な特徴をとおして den の文法化のプロセスを明らかにし、さらに日本語「まで」・中国語“到”の文法化との対照を試みた。(論文(2))

③日本語助詞とそれに相当するベトナム語の前置詞を取り上げ、ベトナム語圏学習者から見た問題点や使い分け、類似点と相違点等について、多数の例文をもとに指摘した。(発表(5)(2))

(3)ベトナムにおける日本語教育・人材育成への貢献について

ベトナム・日本人材協力センター(VJCC ハノイ)との連携・協力のもと、継続的にセミナーを開催する準備を進め、同センターにおいて2008年3月に音声・発音習得についての第1回目のセミナーを行った(「特別日本語教育セミナー」)。これ以降、VJCC ハノイでは2008年6月、2009年3月、2010年3月にセミナーを実施した。さらに、セミナー開催地域の拡大として、フエ外国語大学においても2009年8月、2010年3月に実施した。これらは、ベトナムにおける調査に基づく研究成果の現地での公表(発表)をとおして、ベトナムにおける日本語教育への応用やベトナムの日本語教師への研修の場の提供をするものである。未だ研究環境の整っていないベトナムにおいて、現地での調査・研究とその成果の教育への応用を意図して継続的・定期的実施されたセミナーの前例はなく、有意義であったと言える。何より、ベトナム現地の研究協力者や日本語教育関係者、現地の国際協力関係者からも継続が求められており、本研究課題終了後も何らかの形で継続すべきものと考えている。

また、主に研究代表者が行った調査票調査は、調査票作成から調査の実施まで現地協力者の協力を得て行い、さらにセミナーにおいても調査票を含めた調査・分析方法も取り上げた。このことは、ベトナムにおいてはまだ実施が非常に少ない言語習得調査とその結果分析について、実践的な方法論を提供する機会にもなったと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

(1) 杉本妙子「ベトナム語圏学習者における文法の習得について：助詞を中心に」ハノイ大学日本語教育開始35周年記念国際シンポジウム論文集(掲載確定)、査読無、p.153-160, 2010

(2) 村上雄太郎「方向動詞の文法化—ベトナム語のden(着く)の場合—」, アジア言語論叢(神戸市外国語大学)8, 査読無, p.65-82, 2010

(3) 村上雄太郎「ベトナム語授与動詞 cho の文法化—使役動詞から接続詞へ—」, 『ヴォイスの対照研究—東アジア諸語からの視点』(編集者名:生越直樹、木村英樹、鷲尾龍一), くろしお出版, 査読有, p.143-154, 2008

(4) 村上雄太郎「文法化の観点から見るベトナム語の補助動詞 di の意味と用法—日本語の「ていく」との対照を試みて」, 東京外大『東南アジア学』13, 査読無, p.35-47, 2008

(5) 杉本妙子「ベトナム語圏日本語学習者の発音の誤用と日越語音声の特徴について」, KY YEU HOI THAO KHOA HOC QUOC TE NGHIEN CUU VA DAY-HOC TIENG NHAT (ハノイ国家大学外国語大学), 査読無, p.347-359, 2007

〔学会発表〕(計7件)

(1) 杉本妙子「日本語の文法(助詞)の習得を考える：ハノイの大学生に対する調査をもとに」, 特別日本語教育セミナー, VJCC力センター(ベトナム・ハノイ), 2010年3月14日

(2) 村上雄太郎「日本語の助詞の諸問題—ベトナム語との対照という観点から」, フエ特別日本語教育セミナー, フエ外国語大学, 2009年8月19日

(3) 杉本妙子「ベトナム語圏学習者にとって習得しにくい助詞：格助詞「を」を中心に」, 日本語教育開始35周年記念国際シンポジウム(ハノイ大学), ハノイ大学(ベトナム・ハノイ), 2008年11月21日

(4) 村上雄太郎「日・越両言語における接続詞化について—「のが／のを」と“đă...lại...”の場合を中心に—」, 日本語教育開始35周年記念国際シンポジウム(ハノイ大学), ハノイ大学(ベトナム・ハノイ), 2008年11月21日

(5) 村上雄太郎「日本語における助詞の使い方—ベトナム語との対照から見た格助詞—」, 特別日本語教育セミナー, VJCCハノイ(ベトナム・ハノイ), 2008年6月22日

(6) 杉本妙子「日本語の「長音・短音」の習得について—ベトナム人学習者を中心に—」, 特別日本語教育セミナー, VJCCハノイ(ベトナム・ハノイ), 2008年6月22日

(7) 杉本妙子「ベトナム語圏日本語学習者の発音の誤用と日越語音声の特徴について」,

日本語学・日本語教育国際シンポジウム (ハ
ノイ国家大学外国語大学), 2007年11月15
日, ハノイ (メリアホテル)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉本 妙子 (SUGIMOTO TAEKO)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号: 30206429

(2) 研究分担者

村上 雄太郎 (MURAKAMI YUTARO)

茨城大学・工学部・教授

研究者番号: 50239505